

アスペルガー症候群への理解と対応

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士） 金屋光彦

1 発達障害の出現率

発達障害者支援法が2005年4月に施行されて以来、教育現場でも「適切な教育支援と支援体制の整備等の必要な措置を講じるものとする」（「発達障害者支援法の施行について」第27）の観点から、障害をもつ児童生徒学生への支援が徐々に広がってきました。

一昨年福岡で行われた日本心理臨床学会の懇親会で、某大学の学長が「今、大学で最も問題となっているのは、発達障害、特にアスペルガー症候群を呈する学生への支援である」と語っていたのが印象深い。

学校に通う子どもたちに散見する発達障害は、「自閉症（PDD）」、「注意欠陥多動性障害（ADHD）」、「学習障害（LD）」の3つが主なものです。

2012年12月に発表された文科省の「公立小中学校の通常クラスに在籍する特別支援を必要とする児童生徒に関する調査」によると、6.5%の割合で発達障害の児童生徒がいる可能性が明らかになりました。同様の調査は2002年にも行われ、その時も6.3%の結果が出ています。学習面や行動面で著しい困難を示し、特別支援を必要とする子どもたちが、1クラスに平均2人はいるのです。

2 自閉症児の発見

知的遅れのない自閉症を高機能自閉症と呼びますが、さらに言葉の遅れも3歳児検診などで見つからない、比較的軽い自閉症のレベルをアスペルガー症候群と言います。

コミュニケーションや社会性に重い障害を持った自閉症児は、精神科医レオン・カナリーによって1943年に発見されました。

その翌年、コミュニケーションが苦手な常同行動や強いこだわりを示し、一見自閉症児と同様の社会的困難を抱えてはいるが、知的や言葉の遅れはなく、かつ独創的とも言えるユニークな能力を持ち得る一群の子どもたちの存在が発表されました。この論文を記したのが、オーストリアの小児科医、ハンス・アスペルガーでした。彼は20年以上もの臨床的経験の中から、アスペルガー症候群の子どもたち

を見出したのです。

3 アスペルガー症候群の特徴とケース

アスペルガー症候群の特徴は、①周囲と話がかみ合わず、対人関係がうまくいかない、②こだわりが強い、③いつもと違う出来事や突発的な変更には弱い、④音やにおいに敏感、⑤ユニークで優れた能力を持つ、⑥好きなことは徹底的にやり続ける、等がその主なものです。

今は高校生に成長したA君も、いつも一人で砂遊びや一輪車で遊んでいたアスペルガー症候群の小学5年生でした。「どうせ悪口を言われ、いじわるされるだけだ」と言って、クラスに入らず、学校へ来ても隣の空き教室で、苦しんでいました。

その年、その学校へ初めて赴任した私は、その空き教室で彼と初めて対面しました。シューティングが好きな彼は、その時もさかんに掃除道具やゴムを飛ばしてきたのを、昨日のこつのように覚えています。

以来、彼を攻撃するクラスの悪童たちの牙を折りつつ、トラブルが多いA君を、担任教諭と連携して支援しました。この担任H教諭は、いろいろな問題行動を温かく無視しながら、彼も大事な級友の一人だという雰囲気、クラス内に培っていきました。

それまで学校不信でいっぱいだった母親とも、定期的に面接を続けました。障害を持つ子どもの親は、愛情深い親ほど、わが子を守ろうとし、学校への要求も厳しくなります。その背景には、「自分の子に申し訳ない」という罪障感もあるといえるでしょう。

A君の母親は、カウンセリングを続ける中で、何をすることがA君にとって良いのかを理解してくださるようになりました。毎日のように、彼のリソースや少しでも進歩したところを、担任が母親に連絡し続けてくれたこともあって、次第に学校を信頼するようになっていきました。そうして、A君は、当初「あんな怖い先生のクラスは嫌だ」と言っていたのが、「あの先生にほめられたい」という意識へと変わっていったのです。

<つづく>